



令和2年度



第38回福祉体験 作文コンクール

優秀
作品集



©aichikenshakyo

社会福祉法人愛知県社会福祉協議会





はじめに

本会では、昭和五十八年から「福祉体験作文コンクール」を実施しています。本年度は、小・中・高等学校あわせて百三十四校、二百名の児童・生徒の皆様からご応募をいただきました。新型コロナウイルス感染症が拡大し、多くの市町村において、児童・生徒の福祉実践教室や夏休みの青少年等ボランティア福祉体験学習が中止になる中、作文コンクールにご応募いただいた皆様方に厚くお礼申し上げます。

近年、様々な場面において児童・生徒などの若い世代が多様なボランティア体験や福祉活動に取り組む機会が増え、福祉やボランティアへの理解・関心が広まってきております。本会といたしましても、今後、地域福祉活動への支援や福祉教育活動への充実に向けて、より一層取り組んで参りたいと考えております。

このたび、選考委員会において厳正なる審査をし、二十六編の入選作品が決定されました。ここに、本年度の優秀作品集を作成しましたので、今後の福祉教育活動の推進にお役立ていただきたいと思います。

最後に、審査にご協力くださいました各委員の方々、作品の応募にご協力くださいました各小中高等学校、各市町村社会福祉協議会、さらにはボランティア関係者の皆様方に厚くお礼申し上げます。

令和三年二月

社会福祉法人 愛知県社会福祉協議会

はじめに	1
目次	2

小学校低学年の部

がんばっているもうどうけん	豊橋市立芦原小学校	一年	竹村 祐香	4
ありがとうの気もちから	西尾市立室場小学校	二年	村井 瑛仁	5
わたしのお兄ちゃん	あま市立宝小学校	二年	伊藤 咲	6
一二〇センチの世界	一宮市立中島小学校	三年	水野 陽遥	7
打ち水	小牧市立三ツ渕小学校	三年	船橋 奏多	8
体が不自由な方の気持ちをまなんで	あま市立甚目寺小学校	三年	中村 紗奈	9

小学校高学年の部

「人を助ける」お仕事	春日井市立丸田小学校	四年	伊藤 沙樹	10
ぼくもいつか友達のように	春日井市立鳥居松小学校	四年	奥田 千葵	11
ぼくのまわりの福祉	田原市立神戸小学校	四年	柳田 凌央	13
今の私にできること	清須市立西枇杷島小学校	四年	八田 空美	14
強く生きるお姉ちゃん	弥富市立栄南小学校	四年	伊藤 幸穂	15
「おばあちゃんが教えてくれたこと」	小牧市立北里小学校	五年	吉田 琴葉	16
幸せにする力	南知多町立大井小学校	五年	鈴木 恵衣	17
みんなにやさしい世の中へ	豊川市立国府小学校	六年	近藤 一花	18



一步をふみ出して・・・・・・・・・・・・・・・・	新城市立千郷小学校	六年	伊藤美愛	19
電車での思いやり・・・・・・・・・・・・・・・・	愛西市立佐屋小学校	六年	加納莉愛	20

中学生の部

福祉とボランティア・・・・・・・・・・・・・・・・	新城市立千郷中学校	一年	梅田 禅之助	22
あの人にもまた会ったのなら、・・・・・・・・	知多市立八幡中学校	一年	鰐部 彩葉	23
「普通」って何？・・・・・・・・・・・・・・・・	豊明市立沓掛中学校	一年	石川 葵	25
正解なんてないけれど・・・・・・・・・・・・・・・・	豊橋市立高師台中学校	二年	中根 あさひ	26
ボランティアへの一步・・・・・・・・・・・・・・・・	一宮市立尾西第一中学校	二年	土井 未彩	28
知ることの大切さ・・・・・・・・・・・・・・・・	清須市立新川中学校	二年	山内 菜々恵	29
笑顔のお返し・・・・・・・・・・・・・・・・	設楽町立津具中学校	三年	佐々木 穂乃花	31

高校生の部

本人がそう言うから・・・・・・・・・・・・・・・・	愛知県立海翔高等学校	一年	勝野 結依	33
夢を後押ししてくれるもの・・・・・・・・	学校法人さくら学園安城生活福祉高等専修学校	二年	西山 響	34
自分にできること・・・・・・・・・・・・・・・・	愛知県立岩津高等学校	三年	近藤 未奈子	36

審査経過・・・・・・・・・・・・・・・・				38
作文コンクール要項・・・・・・・・				39

がんばっているもつぐんけん

豊橋市立芦原小学校一年

竹村 祐香

わたしはほいくえんるとき、はたらくいぬのほんをよんでもうどうけんのことをしました。もうどうけんは、めのみえないひとのおてつだいをするいぬです。ほんをよんでもうどうけんにあつてみたくなりました。おかあさんといっしょにしらべて、しずおかけんにある「ふじハーネス」にいきました。そこではアイマスクをしてもうどうけんとあるいたり、もうどうけんについてはなしをききました。アイマスクをするとまっくらで、めのみえないひとのきもちがわかりました。まえがみえないのにもうどうけんがとまったり、かいだんがあつたりすると、こわかったです。かかりのひとはなしをきいて、びつくりしたことがあります。わたしは、もうどうけんにあつたらさわつていいのかとおもつていました。でもかかりのひとはなしをきくと、もうどうけんにあつてもさわつてはいけないということがわかりました。さわいだり、さわつたりすると、びつくりしてしまつておしごとにしゅうちゅうできないからです。もうどうけんにあつたら、しずかにみまもつてあげてほしいそうです。こまつているときに「なにかおてつだいすることはありますか」とこえをけるとたすかるそうです。わたしも、もうどうけんにであつたらそうしようとおもいました。わたしももうどうけんみたいにできることがあれば、なにかおてつだいをしたいとおもいました。まずはまわ

りでこまつているひとがいたら、こえをかけてみようかとおもいます。そして、いつかピーウォーカーをやつてみたいとおもいました。ピーウォーカーは、もうどうけんになるまえのこいぬをそだてるボランティアです。ふじハーネスにいつていろいろなおもいがありました。いぬもひととおなじぐらいかんぱつていとおもいました。いぬもおしごとをしてひとにほめられると、うれしいんだとおもいました。わたしもできることがあればやりたいとおもいます。





ありがとうの気もちから

西尾市立室場小学校二年

村井 瑛仁

「ふくしって何。ボランティアって何。」

ぼくはお母さんに聞いて、いっしょにじしよでしらべました。「いろんな人のしあわせ。みんなが元気にたのしく生きていくために、自分にできることを考えてすること」だと分かりました。

今コロナがはやっています。そのせいで、三月から学校が休みになってしまいました。二年生になって、またすぐに休みになってしまいました。せっかく二年生になったのに、みんなでじゅぎょうがやれなくて、いやだなあと思いました。

ぼくは、お父さんもお母さんもしごとに行ってしまうので、自主とう校教室に行きました。先生や友だちに会えたけど、しゃべらない、いっしょにあそばない、というルールがありました。だから、あんまり楽しくありませんでした。それに、毎日お母さんがおべん当を作ってくれたけど、大へんそうでした。

西尾市コロナきゆうさい会の人が、自主とう校をしているぼくたちのために、ただで、おべん当をとどけてくれることになりました。きょう力してくれたごはんやさんが作ってくれたそうです。そのおべん当は、すごくおいしかったです。

そう理大じんのあべさんは家にマスクをおくってくれました。二まいとどいたけど、ぼくの家は、八人家ぞくなので、足りませんでした。やつきよくでも、紙マスクは、売り切れでした。でも、ぼくたちは、学校

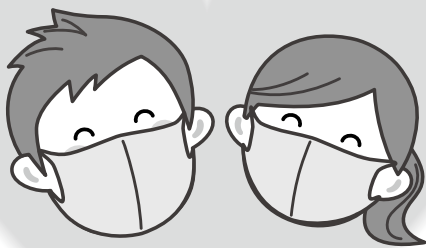
やじどうクラブで、手作りマスクをたくさんもらいました。

コロナで大へんなのはみんな同じなのに、ぼくたちのために、きふしてくれたり、作ってはいたつしてくれて、やさしいなと思いました。ぼくたち子どもが、コロナにまけないで、元気に学校に行けるように考えてくれたのかなと思います。その人たちにありがとうという気もちをつたえたくまりました。

だれかのためにぼくができることは、どんなことがあるんだろう。みんなが気もちよくくらせるように、ごみひろいをする。おじいちゃんやおばあちゃんに元気にあいさつをして、たくさんパワーをおくる、こまっっている人がいたら、

「だいじょうぶですか。」

と、声をかけてあげる。ぼくにもできることが、いっぱいありそうだなと思いました。それをこれからやっていきたいです。



わたしのお兄ちゃん

あま市立宝小学校二年

伊藤

咲

わたしのお兄ちゃんは、ダウンしそうです。かぞくで春日井市のあいちけんコローへ行きました。

そこには、車いすの人やねたきりの人、じゆうに体をうごかせれない人がいました。お兄ちゃんもそのびょういんにかよって話すくんれんをしています。

お兄ちゃんは、十さいですがしゃべれません。でも、いっしょにかくれんぼをしたり、すもうをしたりたのしく二人であそべます。

お兄ちゃんは、わたしとちがう学校にかよっています。とおい学校なので、いえの車とスクールバスにのって行っています。学校では、三りん車やゆうぐであそんだりダンスをおどったりしてたのしそうです。それは、お兄ちゃんにとってべんきょうになっっているそうです。わたしはうらやましいとおもいますが少しかわいそうな気がします。

なぜかというとお兄ちゃんは、みんなとおしゃべりをしたり、べんきょうのもんだいをといたりすることができないからです。

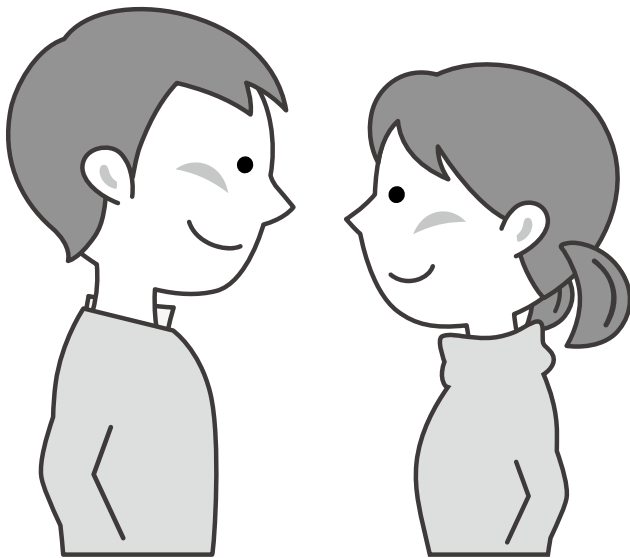
でもお兄ちゃんは、学校にとってもたのしそうに行きます。そんなお兄ちゃんを見ているとわたしものしい気持ちになります。

お兄ちゃんといっしょに学校に行けたらいいなあとおもいます。

お兄ちゃんは、きゆうにはしったり、すわりこんだり、大きい声をだしてまわりの人たちをおどろかせることがあります。そんなときわたしは、ちよつとはずかしくなります。おかあさんは、お兄ちゃんが大きく

なったら、なると言っていました。早くなおってほしいし早くなおるようにお手つだいをしようとおもいます。またお兄ちゃんのようなダウンしうの子がこまっていたらたすけたいです。

けんかもするけど、いつもあかるく、ひょうきんでみんなの気ものお兄ちゃん。そんなお兄ちゃんがわたしは大すきです。





一二〇センチの世界

一宮市立中島小学校三年

水野 陽遥

二月のある金曜日。下校時間に先生が大あわてで、

「ひなたちゃん、おうちにすぐ帰って。」

とほか後子ども教室の中で言われた。かるい気持ちでお姉ちゃんたちとおしゃべりしながら帰った。げんかんを開けるとお母さんが大けがをしていた。左足がほうたいでグルグルまき。歩けない。動けない。

「えー、どうしたの。」

わたしはびっくりしすぎて、ドキドキした。お父さんは、東京でおし事をしているのでお母さんと二人の生活。これからどうなるのかと、とても心配になった。それから毎日の生活はともかわった。

スーパーへ行ったときのこと。まつ葉づえでのお買い物はとてもむずかしかった。わたしは、ふと車いすを思い出した。ゆう気をふりしほって、お店の人に

「車いすをかせてもらえませんか。」

と聞いた。

「ありますよ。どうぞご利用ください。」

とたたんだある車いすをかせてくれた。ベンチでまっっているお母さんの元へ運んだ。しかし、なれていないので使い方が分からなくてこまった。なんとかすわれたけど、すすまない。わたしは、秋の尾西まつりで車いすの体けんをしたことを思い出した。おし方、すすみ方、まがり方を習った。まず広い場所までおもかったけど一生けんめいおした。と中、で

こぼこしてるところがすすまなくてこまった。それからお母さんに、習ったことをつたえた。その時、一二五センチのわたしよりお母さんが小さいことに気づいた。

せまい所へは入れない。気づいてもらえずぶつかりそう。高い場所の商ひんがとどかなくてほしい物が買えない。

「すみません。ごめんなさい。」

とお母さんはお買い物の間ずっと言っていた。わたしは出来るかぎりお手つだいをした。ふと、一人でお買い物するときはだれも手つだつてくれないんだらうなと悲しくなった。わたしが前を歩いていてお母さんがついてきていないこともあった。気づかないさかで登れなかった。

車いす生活は、少しの間でもとても大へんだった。わたしはこのけいけんから、三つの声かけをすることに決めた。

一つ目は、こまっっている人がいたら、「お手つだいしましょうか。」と声をかける。

二つ目は、車いすがすすまなくてこまっっていたら、「おしましうか。」と聞いてみる。

三つ目は、エレベーターでボタンがとどかない人がいたら、「何かいですか。」と声をかける。

知らない人に手つだつてもらったときのお母さんの「ありがとう。」

のえ顔はわすれない。みんながえ顔の世の中がわたしはいいなと思う。



打ち水

小牧市立三ツ淵小学校三年

船橋

奏多

ぼくは今自由けんきゅうで、気温をはかっています。八月で一番高い時は、四十どにもなりました。父が小学生のころは、四十どまでいくことは、なかったそうです。どうしてこんなに温度が高くなったか父と話してあつてみました。原くんは、工場や車がふえてにさんかたんそが、ふえたことです。

「にさんかたんそを少なくすればいいのに、どうして、へらさないのか。」と、父にきいてみた。父は、「みんなべんりなくらしがしたいからだよ。」と言いました。ぼくもべんりなくらしをしています。スイミングスクールに行くときは、車にのっているし、夜は、でんきをつけて、勉強しています。母は、いそがしい時は、ハンバーガーをかってきます。

もしもこのまま地球の温度があがつてしまったら、一〇〇年後にはどうなってしまうんだろう。今、地球は、青いけど、赤くなってしまうんじゃないかな。その時、ぼくのすきなウミガメは、生きてられるだろうか。海の温度もあがつてしまったら、ウミガメのえさもなくなって、ぜんめつしちゃうんじゃないだろうか。

ぼくは、少しでも、地球の温度を下げたいと思いました。ぼくの家の前のコンクリートはすごく、アツチツチ。かい犬の、りようまは、足のうらをやけどするので、歩けないけど、土の上ならりようまは、歩ける。どうやったらコンクリートの温度が下がるか父にきいてみました。父は、「打ち水をするといい。」と言いました。ぼくは、「打ち水ってなに?。」

とききました。父は、「外で、水をまくことだよ。そうすれば、地めんがひやされるしすずしい気分になるよ。」と言いました。ぼくは、「打ち水をしたらなんど下がるの。」とききました。父は、「分からない。」と言いました。

さつそくぼくは、外にでて、打ち水をしようと考えました。令和二年八月二十二日の午後一時三十分。外にでてみると、いきをすうだけで、からだにあつい空気が、入ってくるようだ。木やへいや自てん車は、とろけそうだ。ぼくは、地球をすくうために、一びようでも早く打ち水をしようと思いました。

まずじょうろに水をいれ、それを庭のコンクリートに、ドバドバかけた。コンクリートは、メリメリと音をたてて、ひやされていく。そんなに気持ちいいなら、水をあげよう。ぼくは、れいとうこにつつ走り、水をまいてあげた。これを、打ち水というんだ。ぼくははつめいした、地球をすくうひみつわざだ。

おとなは、どうしてにさんかたんそをもっとへらさないのかな。地球よりもべんりな生活の方がだいじなのかな。もしも、みんながいつせいに、打ち水と打ち水をやったら、もつと地球の温度は下がるんじゃないかな。

こんどは、弟と妹もさそつて打ち水をしてみよう。





体が不自由な方の気持ちをまなんで

あま市立甚目寺小学校三年

中村 紗奈

私は、福祉実践教室でこうれいしゃぎじ体けんをして、お年よりになつたらどうなるか体けんしました。なぜ私がこうれいしゃぎじ体けんをえらんだかと言うと、お年よりを見ると歩くのがおそかったり、かいだんを上がるのがつらそうだったりしているの、お年よりになってみてどれだけ大へんなのか知れたかったです。

ぎじ体けんでは、手首と足首におもりを、ひじとひざに動きにくくするそうちを、こしにはこしをまげるそうちをつけ、目を見えにくくするゴーグルをつけました。そのじょうたいでろう下を歩いたり、かいだんを上がり下がりしました。実さいに体けんしてみるとゴーグルでまわりのものが見えにくく、つえをついて歩かないと歩くのがとってもこわかったです。こしがまがると下ばかり見え、前が見えにくくなり、歩くだけのことがかんなにもたいへんだということを知りました。

私のおばあちゃんは、ひざがいたくて歩くのに長い時間がかかったり、かいだんを上り下りする時は、私のかたをつえがわりにして、のぼったりいつもつらそうです。おじいちゃんのはのびようきで体の左半分が動かなくなっていました。少し歩いたり、トイレに行ったりする時は足にそうぐをつけてつえをついて生活しています。長い時間のいどうや、おでかけは車いすでいどうします。おじいちゃんは動きたい時にすぐに動けなくて本当にかわいそうです。ごはんの時やきがえる時は一人でできないのでおばあちゃんに手伝ってもらっています。おふろは家で

入るのはとてもたいへんなのでデイサービスに行つて入れてもらっています。動けないおじいちゃんもくるしそうです。そのおじいちゃんを、かいごしているおばあちゃんも足がいたいので、体をこわさないかすぐ心ばいいます。

実さいに福祉実践教室の体けんをして、こしがまがると、さらに足が上がりになると知りました。目が見えにくくなるとかいだんをふみはずしそうで、こわかったり、不安になったりすることもわかりました。体けんをすることによって本当のつらさやたいへんさが分かった気がします。私は今、自由に動くことができ、本当にしあわせだなあと実感しました。

今までは、体の不自由なおじいちゃんやおばあちゃんを「たいへんそうだなあ」と見ていただけですが、体の不自由な方の気もちがとてもよく分かったの、これからはお手伝いできることはすすんでやりたいと思います。また、町でこまっているお年よりを見かけたら、ゆうきを出して声をかけてみようと思います。

みんなが元気でえがおになる町にしていきたいです。



「人を助ける」お仕事

春日井市立丸田小学校四年

伊藤 沙樹

わたしは、保育園の卒園式で「けい察官になって困っている人を助けたい」と将来のゆめを発表しました。今は「介護士」になりたいと思っています。きっかけは、小さい頃からずっと一緒にいるおじいちゃんが病気で認知症になり、おばあちゃんとお母さんが交代して介助をしているのを見ていて、デイサービスを利用する時、お母さん達は、気軽に買い物や用事をすませることが出来ているし、おじいちゃんも安心してすごしていることです。介助が必要な人を助ける仕事によって、介助するおばあちゃんたちもそうだし、介助される人も安心してすごせるようになるから、そんな仕事をしたいと思いました。本やSNSでも「介護」「福祉」に関する単語を調べるようになりました。「介護」といっても、わたしが知っていた仕事より多くさんの仕事、資格があることを知りました。もっと色々調べてみたいと思っていた今年の夏休みに、私は初めて入院・手術を経験しました。

入院当初は、感染症対策で、お母さんの付きそい・泊まりが出来ず、不安で、退屈で、寂しい想いでした。入院二日目には、「帰りたい」と言ってお母さんを困らせていました。そんな時に病棟で声をかけてくれたのが「保育士」さんです。今まで私は保育士さんは保育園が職場だと思っていたいました。でも、話を聞いたなら、その小児病棟には、八人から十人

くらいの保育士さんがいて、患者さんの話し相手になったり、できる範囲で工作やカードゲームなどをしたりして、少しでも楽しく患者さんが入院生活を送れるよう、お手伝いしているそうです。わたしもたくさん遊んでもらって以降、入院が楽しくなりました。寂しくもなくなりました。保育士さんの仕事が保育園以外の、例えば美容室や歯科などにも、たくさんあることを知りました。他にも看護師さんは予防接種や風邪をひいた時に病院に行くと、先生の補助をしたり注射をしたりしているのを見ていましたが、病棟で見た看護師さんの仕事は全然違っていました。検温や点滴の取り換えなどたくさんさんの仕事を、びっくりするほどテキパキと無駄の無い動きで行っていました。にもかかわらず、ナースコールの時やシャワーの説明など、どんな時も笑顔で優しく、私はこんなに忙しい仕事でも、笑顔で接してくれて本当に尊敬しました。他にも病棟には食事を運んでくれたり、ベットの準備や片付け、各部屋のアルコール消毒液の補充などをしてくれたり、入院患者、看護師さんの補助をしてくれたりするスタッフさん、他にも、きつとたくさんさんのスタッフさんが、先生や患者さんを助ける、重要な仕事があることを知りました。手術室へも病棟看護師さんの案内で移動をしました。手術室には、五・六人の手術着を着た人たちが何チームかに分かれていて、麻酔医さんの他にも、こんなにたくさんさんの人が私の手術をするのにチームとして仕事をしてくれるのだと改めて実感しました。

たった数日間の入院でしたが、知っている職業だけど仕事の内容や働く場所が色々あることや、あまり知られていないけれど、たくさんさんの人の手で病院は回っているのを知りました。「介護」の分野でも、介護士さん以外にも色々な資格や仕事があると思うので、もっと調べたいと思います。

今年の夏休みは世界中が感染症でいつもと違い、私自身も入院・手術で夏休みが終わってしまいましたが、職業について色々な事を知り、考える事ができた夏休みでした。



その中でも一番の収かくは、人に感謝する事の大切さを学ぶ時間をすごせた事です。この経験が私にとって宝物になると思います。この先、色々な経験や勉強をしていく間に、もっと沢山の、「人を助ける仕事」を知りたいと思います。その中で介護関係の仕事以外を選択するかもしれないが、いつか必ず誰かの助けになる仕事につきたいと思いました。

ぼくもいつか友達のように

春日井市立鳥居松小学校四年

奥田 千葵

「だんさがあるからね。」ぼくが昨年、予防せつ種を受けに近くの病院へ行くと、病院のトイレのドアのそばから男の子の声が聞こえてきました。「何だろう。」とふり返ってみると、青い車イスに乗ったおじいさんのイスをおしてあげている男の子が二人いて、よく見てみると、ぼくのクラスの友達と、その時に六年生だったお兄さんでした。友達とお兄さんは、おじいさんの車イスをなれた様子でゆっくりとおしながら「まだだんさがあるよ。だいじょうぶ?。」とやさしく声をかけて、トイレにもいっしょに入って、かい助してあげていました。ぼくは正直びっくりしました。そのクラスの友達も、友達のお兄さんもクラスの中でもひょうきん者で、すごく明るく楽しくて、いつもおもしろいことを言ってみんなをわらわせている子だったからです。おじいさんへのやさしさや車イスのおし方はとてもなれていて、友達にとってはきつともいつもやっている当たり前のことで、毎日の生活の一つなんだろうなと思いました。その時いつもひょうきん者の友達とお兄さんがとてもかっこよく見えました。

その後しばらくして、ぼくのひいおばあさんが入院した病院へお母さんと行くことになりました。おばあさんが車イスに乗るのでかんごしさんがぼくとお母さんに車イスのおし方を教えてくださいました。車イスは高さがひくいため、スピードがあると乗っている人はこわく感じるので、ふつうに歩くスピードよりゆっくりとおすことや、ガタガタした所はよ

い
で
す。

けいに感じるので気をつけてあげること、特にだんさのあるところは気をつけなさいといけなため、おし方はむずかしく、話を聞いてもほくはあまりよくわからなかったので、「まだおすのは自信がないな。」と思い、ほくは平らなところで少ししかおしてあげられませんでした。その時にやはりクラスの友達とお兄さんはすごいなと思いました。このかんごしさんの話からも、大切なのは、車イスに乗っている人の気持ちになってあげることで、スピードやだんさ、車イスの調子が悪くないかを気にかけてあげたり、友達とお兄さんのように、やさしく声がけをしてあげることが大切だと知りました。そしておす方もなれるまでしっかりと勉強してからでないときけんだと知りました。

三月、四月、五月とコロナ感せんのために学校が休校になりました。いつも当たり前になっていた生活が当たり前ではなくなりました。学校へ行くこと、外で遊ぶこと、友達とくつついて遊ぶこと。そのけいけんをして、体が不自由な人や病気を持つている人の気持ちが少しわかったような気がします。「自分の足で歩いてみたい」「走ってみたい」「外へ出てみたい」「きれいなけしきを見てみたい」「家族の人の声を聞いてみたい」ほく達がふだん当たり前にしていることが体の不自由な人達には当たり前ではなくて「こんなことをしてみたい。」という、かなえてみたい夢になっっているんだということを感しました。だからこそ、友達や友達のお兄さんみたいに、おじいさんが車イスにのっついてこわくないようにゆっくりおしあげて、やさしく声をかけてあげたり手をかしてあげて、おじいさんの気持ちになっってあげることが、おじいさんに外へ出るよるこびを感じさせてあげれることにつながるんだろうなと思います。

四年生になっって三年生の時にひきつづいて、その友達と同じクラスになりました。明るくて楽しい、おじいさんにもやさしい良い所がたくさんある友達です。きっと今もおじいさんの車イスをおしてあげていると思います。大切なことを教えてくれる友達をこれからも大切にしていきたいと思います。そしてほくも相手の人を思いやれる人になっていき





ぼくのまわりの福祉

田原市立神戸小学校四年

柳田 凌央

ぼくのお母さんは、視覚障がい者です。視覚障がい者だけど、ギターをひいて、歌を歌います。

田原市内の福祉施設に行つて、おじいちゃん、おばあちゃんたちに歌を歌っています。ぼくが、

「なんで歌に行くの？」

と聞くと、お母さんが、

「おじいちゃん、おばあちゃんたちが歌を聞いて、とっても喜んでくれるから、お母さんも喜んでもらえるとがんばる力をもらえるからだよ。」と教えてくれました。

ぼくも学校が休みの時には、時々お母さんについて行くことがあります。お母さんのギターに合わせてタンバリンをたたいたり、一緒に歌を歌ったりします。おじいちゃん、おばあちゃんたちは、とってもやさしい笑顔で歌を聞いてくれたり、一緒に手をたたいて歌ってくれます。始めはきんちようしていたぼくも、おじいちゃん、おばあちゃんたちの笑顔につられて自然に笑顔になり、楽しい気持ちになりました。おじいちゃん、おばあちゃんたちは、

「かわいいね。上手だね。ありがとね。」

と言ってくれました。少しはずかしくて、とってもうれしい気持ちになりました。

お母さんがいつも、こう言います。

「ありがとうはまほうの言葉。ありがとうと言ってもらえると、とてもうれしいし、また次もがんばろうという気持ちになるんだよ。」

おじいちゃん、おばあちゃんたちが本当にうれしそうに笑顔でありがとうと言ってくれた時、また来たいな、また一緒に歌いたいなと思いました。お母さんもきつと、こんな気持ちなのかな？と思いました。

歌を歌い終わった時、一人のおじいちゃんが、

「今日もありがとう。元気でがんばりんよ。おうえんしとるでね。」

とお母さんに声をかけていました。お母さんは、

「ありがとうございます。がんばります。また来ますので、元気で待っていてくださいね。」

と言っていました。ぼくはその話を聞いて、お母さんがおじいちゃんに元気をあげて、おじいちゃんがお母さんに元気をくれて、おたがいがんばる力と元気をあげあつこしているように見えました。視覚障がい者だから、高いい者だから、助けてもらうばかりではなく、助けあっているように感じました。

ぼくのお母さんは、目が見えません。だから出来ない事もあります。信号は、ぼくが教えます。買い物ではお母さんが買いたい物をぼくが見つけます。階段やだんだん差は時どき、転んでしまうので、教えてあげます。でもお母さんは、出来る事もあります。毎日おいしいごはんを作ってくれます。宿題でわからない所は教えてくれます。歌を歌ってみんなに元気をとどけています。何より、お母さんががんばっているすがたを見るとぼくもがんばる力をもらいます。

ぼくもお母さんとがんばる力と元気をあげあつこしています。ぼくとお母さんの周りには、毎日福祉がいっぱいです。

今はコロナ自しゅくで福祉施設には行けません、コロナが落ち着いた時にはお母さんと一緒にまたおじいちゃん、おばあちゃんたちに会いに行きたいです。そして、また、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、ぼくでがんばる力と元気のあげあつこをしたいです。

今の私にでもなりたい

清須市立西枇杷島小学校四年

八田 空美

小児科の先生になりたいというのは、小さいころからの夢の一つです。そんな私は、今までなんとなく人のために何かをしたいとは思っていましたが、実さに行動にうつす努力をあまりしていませんでした。

四年生になったころから、人の役に立ちたいと強く思うようになりました。そんな時、二年ほど前にキャンプでお友達になった女の子を思い出しました。女の子のかみの毛が、つやつやで長くてすてきなあと

思ったので、「かみの毛、とても長くてきれいだね。」

と言ったら、「病気の子のウィッグを作るためにきふをするから、かみの毛を伸ばしているんだよ。」

と教えてくれました。

私は生まれてから今まで、切りそろえていどしか、かみの毛を切らず、伸ばし続けています。だから、正直このまま伸ばし続けたいという気持ちと、かみの毛をきふして人の役に立ちたいという気持ちでゆれ動きました。ゆれ動くなかで、かみの毛をきふすることについて調べたら、病気や事故などでかみの毛を失った子たちがたくさんいて、私のかみの毛で作ったウィッグをつけて、笑顔になってくれる子がいるんだと思ったから、きふすることに決めました。

かみの毛をきふすることを、ヘアドネーションといいます。ヘアドネー

ションをするには、三十一センチ以上の長さが必要です。今すぐにもきふできる長さはありますが、十才になった区切りでやろうと、きふする時期を自分で決めました。

さっそくヘアドネーションカットにくわしい美よう院をさがして、自分で電話をかけて予約をしました。実さにかみを切るまでにあと数ヶ月あるので、今はヘアドネーションシャンプーでかみの毛をあらっています。ヘアドネーションシャンプーとは、こう入すると、しゅうえき金の全がくが募金としてきふされて、ウィッグを作るお金として役立てられるものです。このシャンプーをお母さんといっしょに美よう院に行きました。かみの毛を切るまでもできることがあってうれしかったです。そして、このシャンプーを家族で使っています。シャンプーのおかげでお風呂でヘアドネーションやボランティアについての話をする

ことがふえました。

私の大切なかみの毛を切ってくれる美よう院の人ともヘアドネーションについて色々とお話することができて、心があたたかくなりました。

ヘアドネーションは、ウィッグを必要としている子へ、ウィッグを届けるだけでなく、かみの毛をきふする人、かみを切ってくれる人、ウィッグを作る人の気持ちがつながっていっしょに届くんだなあと感じました。だから私は、まだかみの毛は切っていないけれど、ヘアドネーションシャンプーを使って、大切にかみの毛を育てていきたいと思いました。そして、今の私にできることをせいっぱいやりたいと思いました。

人のために何かをするということは、自分の成長にもつながっているということを感じたので、思い切って一步をふみ出すことができて、本当によかったです。

私のかみの毛で作ったウィッグをつけて笑顔になってくれることを想像するとうれしので、できるかぎり続けていけたらいいなと思います。そしてこれからは、自分にできることを見つけて、少しずつでも行動にうつしていけるようにしていきたいです。



強く生きるお姉ちゃん

弥富市立栄南小学校四年

伊藤 幸穂

わたしのお姉ちゃんは、二才になる少し前に事故で、のうにしよう害を受けたと家族に聞きました。のうしよう害があると、体を動かすことがむずかしく、生きていくことが大へんだと分かりました。

全力で走った後の苦しいこきゅうのじようたいでいつも息をしていることや、木の根っこが水をすう音まで聞こえてしまうほどのうるさいかんきようの中で生きていることをお母さんから教えてもらいました。わたしはその話を聞いてそんな大へんなからだで生きているなんて、強いなと思いました。

お姉ちゃんはストレッチャーがたで、ねたじようたいでもい動でできる車いすに乗って動します。

お姉ちゃんは、いつもそばにいてくれる人がいます。さらに家族以外にもそばで手伝ってくれる人たちがいます。たとえば、お姉ちゃんのために、おふる屋さんが家に来てくれて、やさしく声をかけながらお姉ちゃんの頭をシャンプーしたり、体をあらったりしてくれます。そのときのお姉ちゃんは、すぐくうれしそうな顔をしていました。それを見て、わたしは、大へんだと思いました。こうして近くにいてくれる人があるから、お姉ちゃんも生きていけるんだと思いました。

お姉ちゃんは絵や詩をかくことが好きで、わたしに、イスの絵をかいてくれたことがあります。その絵には、こんな言葉もいっしょにくれました。

生きている

それだけしかしてあげれない
あなたにしてみらうばかりのわたし

いっぱいがまんさせちゃうね

大きな荷物を持って歩くあなたを

ささえてあげられない

今 くやしいという気持ちが生まれたよ

あなたが休むイスであろう せめて

あなたが泣ける 力をぬける

ゆっくり目を閉じていられる

イスでありたい

ありがとうさっちゃん

みんなにえ顔をつくってくれて

お母さんをえ顔にしてくれて

ほんとうにありがとう

愛をつめて お姉ちゃんより

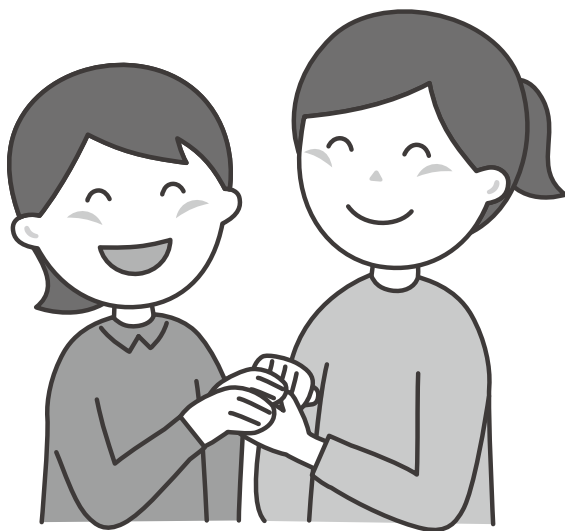
わたしはこの言葉を何回も読んで泣いてしまいました。

お姉ちゃんが絵をかくときは、お母さんにだっこしてもらい、うでを持つてもらって、人指しゆびにいろいろな色の絵の具をつけてかきます。わたしはお母さんを手伝って、絵の具を出したり、お姉ちゃんの指をふいたり、画用紙を取ったりします。わたしも何度かいっしょにとりいで絵をかきました。とても楽しかったです。

お姉ちゃんは、あいうえおの五十音が書かれたボードを指さして、お母さんとお話をします。でもわたしはまだお姉ちゃんと会話はできないけど、ちゃんとわたしを思ってくれる気持ち伝わりします。いつも、早くなおっていっしょにお話をしたいと思っています。

わたしは、お姉ちゃんの足になって、いろいろなきれいな所や楽しい所、お姉ちゃんの好きな温せんにつれていつてあげたいです。

わたしは、お姉ちゃんを通して、しょう害のある人の大へんさが分かったので、お姉ちゃんだけではなくしょう害のある人の手助けをしたいと思っています。



「おばあちゃんが教えてくれたこと」

小牧市立北里小学校五年

吉田 琴葉

私の住んでいる地域には、たくさんのお年寄りが住んでいます。地域のお年寄りの人達には、パトロールボランティアでお世話になったり、登下校時にやさしく声をかけてくれたりします。しかし、日本は今、少子高齢化社会だと聞きます。私達が大人になった時には、働ける人より、老人の人数の方が大きく上回ってしまい、働く私達にとっては大きな負担になりかねないでしょう。では、どうすれば良いでしょうか。

数年前、私のおじいちゃん、おばあちゃんは、介護施設に入居していました。週末になると、家族で施設へ出かけることが多かったです。施設の中はとても清潔にされていました。エレベーターをおりると、かべには入居者の作品や写真がきれいにかがられており、私はそれらを毎回見ていました。そこで働くヘルパーさんは、いつも大きな声でハキハキしゃべります。お年寄りの人はその声で返事をするところがあるのでごく尊敬しています。ぐうぜん食事の時間に居合わせた時は、家族でおばあちゃんの食事の介助をしました。おばあちゃんのベッドを起こしゆっくりと食事を口に運びます。お年寄りはたいいゆっくりと食べるのでおばあちゃんも食べるのに時間がかかります。そして料理はどれも、とろみがついていて、細かく切っており、ゼリーのようにとても食べやすい物ばかりで、まるで赤ちゃんが食べる料理のようでした。私は最初おばあちゃんの食べるスピードが分からず、食べ物をのどにつまらせるんじゃないかとこわかったけど、しだいに、こわくなくなって家族と交代



で、食べさせてあげることができました。食べ終わるまで三十分以上かかったけど、おばあちゃんと少しでも過ごせてよかったな、と思いました。おばあちゃんにはんち症だったので、私の名前を覚えていなくて、どんどん忘れてしまい、そのうちしゃべることもできなくなっていました。少しづつ動かなくなっていく、体も細くなっていきました。赤ちゃんのようになっていくおばあちゃんは、私の目から見ても頼りなく、何もできない存在でした。家には元氣だった頃の写真が置いてあります。しかし、写真で見る姿とはまったくちがいで、別人のようになってしまいました。でも、おばあちゃんが私がお世話をしたり、遊んでくれたりしたのと一緒に、動けないおばあちゃんを介助することで、「恩返し」できるかなあ、と思いました。人間は一人では生きられません。時には人にたよったり、助け合ったりするでしょう。そして、必ず一人でやらなければいけないこともあるけど、人間は順番にこうして命をうけついでいくのだと思います。その後、おばあちゃんは亡くなりましたが、おばあちゃんにしてもらった分は、「恩返し」できたと思います。お年寄りには、私達を育ててくれた大切な命の恩人です。この気持ちを大人になっても、忘れずに、ずっと持ち続けたいです。

幸せにする力

南知多町立大井小学校五年

鈴木 恵衣

福祉実せん教室で、耳の聞こえないNさんのお話を聞きました。Nさんは、三歳の時に耳が聞こえなくなり、大きくなっていくうちに、「私って、じゃま？めいわく？生きていても幸せになれないよ。」と思い、将来を思いえがけず、暗い気持ちで毎日を送っていたそうです。私は、Nさんのその言葉がとても心に残りました。私は、当たり前のようにみんなが楽しく話している会話や、先生の声が聞こえます。それが、何も聞こえないなんて、想像もできません。何だか、不思議な気持ちになります。けれど、それを乗り越えたNさんはすごいと思いました。

「耳が聞こえなくなつて、学校の先生をやっているよ。」

と、Nさんは言っていました。私は、その言葉を聞いてNさんを尊敬しました。障がいがあっても、みんな同じなんだと思いました。

私は、福祉の本を読んで、耳の聞こえない人とのコミュニケーションの方法を学びました。口話、筆談、手話、ほちよう器や人工内耳、空文字、指文字、身ぶり、文字入力など、いろいろなコミュニケーションの取り方がありました。聴覚障がいの人が周りにいたら、その中のどれか一つでもできるようになって、仲良くなりたいです。相手に自分の顔が見えるところまで移動して、コミュニケーションを取りたいです。

もし、私の家族が聴覚障がいになってしまったらと思うと、みんなの声が聞こえなくて、さびしい気持ちになると思います。何も聞こえない

と、一人ぼっちの空間になってしまうので、悲しくなってしまうと思います。

でも、私は、実際に全員耳が聞こえない家族を見たことがあります。その家族は、手話や指文字をして、楽しくコミュニケーションを取っていました。

手話は、人を幸せにする力を持っていると思います。耳が聞こえなくても、手話で他の人といっしょに話をしたり、いっしょに笑ったり、泣いたりすることが出来ます。

Nさんも、小さいころ、

「生きている意味なんてない。」

と思っていたそうですが、大学生の時に手話に出会い、すくわれたそうです。

「会話の方法はちがっても、いっしょに笑ったり、はげましたりして、幸せになれる方法はたくさんある。」

と、言っていました。

障がいがある人も、できることは、自分でやりたいと思っています。何でも助けるのではなく、できることは応えんをして、困っていたら手助けをしたいと思います。障がいがあってもなくても、みんなが安心してくらせる町にしたいです。

「幸せにする力」は、いろいろな力があります。私は、「支える力」、「はげます力」、「笑顔にする力」があると思います。私は、だれかを支え、はげまして、笑顔にしていきたいです。

私の将来の夢は、かんご師になることです。かんご師になったら、きっと、いろいろな病気の人と出会います。また、いろいろな障がいがある人とも接する機会があると思います。どんな人でも、困っていたら、「だいじょうぶですか。」

と、声をかけたいです。そして、みんなが安心して生きていけるように、支えていきたいです。

みんなにやさしい世の中へ

豊川市立国府小学校 六年

近藤 一花

私には小学三年生の弟がいます。でも、私は弟としゃべったことがありません。それは、弟が重度な知的障害のある自閉症だからです。自閉症とは、生まれつきの脳の障害で、他の人とのやりとりがうまくできない、相手の感情やかくされた意図をくみ取ることが難しい、暗黙のルールが理解できない、興味や行動がかたより、こだわりが強いといった特徴があります。弟は、言葉が無くこだわりも強く、地元の小学校では困ることが多く、生きづらさがあるので、特別支援学校に通っています。また、月一、二回言語訓練に通い、放課後はデイサービスを利用している日もあります。

特別支援学校では、五人で一クラスで、専門知識のある先生達と分かりやすい環境の中で自立を目指して、遊びなど興味のあることから始めて、勉強したり、行事にとり組んだりしています。言語訓練では、言語聴覚士の先生が、先にスケジュールを伝え、見通しを持って、コミュニケーションや社会的なやりとりの練習を、分かりやすく集中しやすい個室でやってくれます。デイサービスでは、同じような特徴のある友達と理解のあるスタッフさんといっしょに楽しく過ごしています。

私は、特別支援学校やデイサービスの行事に何度か参加したことがあります。そこでは、生徒や利用者さんが、接客係、スタンプ係、ルール説明係などの役割を持って、生き生きと働いていました。また、みんな



の前で、楽器をえんそうしている子もいました。みんな笑顔でした。働いてくれている子も、参加している子も、その家族も、先生やスタッフさんもみんなです。それは、それぞれ自信をもつてやっているからだと私は思いました。みんなが笑顔だと私はとても、うれしくなります。一人一人が笑顔だと周りにも、その笑顔が広がっていくと思うからです。分かりやすい環境で、分かってくれる先生やスタッフさんがいて、そこにいる人達が全員理解ある人ばかりだから、生きづらい特徴を持っている子達も、みんな笑顔で生き生きとしていました。そういうみんなにやさしい場所がもっと広がっていくといいなと思います。障害を持っていても、持っている人、みんなが幸せに過ごせるといいなと思います。だから私は、みんなにやさしい世の中にするための手伝いが出来るような仕事につきたいです。

一歩をふみ出して

新城市立千郷小学校 六年

伊藤 美愛

「こんにちは。元気ですか。むすめさん、大きくなったね。」

「こんにちは。元気です。むすめは十一才になりました。小学校六年生です。いつも、ありがとうございます。」

と、耳が聞こえない人と手話で話をする母。

五年生の時、学校の総合的な学習の時間に、福祉について学んだ私は、手話に興味をもっていました。そこで母に、

「どうして手話ができるの。」

と聞くと、

「中学生の時に、ろうあの方に初めて出会って、話してみたいと思ったからだよ。それで、手話を少し習ってみたの。」

私もやってみたいと思い、その思いを母に伝えると、母は、にっこり笑って、私に、

「美愛にもできるよ。」

と言ってくれました。それで、母から手話を習うことにしました。

最初に習ったのは、あいさつでした。そして、次に自己紹介を習うと、母が、

「もうできているから、一度、手話で話してみると良いよ。」

と言いました。私は、その言葉におどろきました。

そして、ある日曜日の朝、母と二人で歩いていると、あのろうあの方とすれちがいました。ろうあの方が、

「おはようございます。元気ですか。」
と手話で言い、母が、

「おはようございます。元気です。むすめが手話の勉強を始めました。」
と答えました。そして、母が私に、

「美愛、ごあいさつは。」

というので、私はドキドキしながら、

「伊藤美愛です。よろしくお願いします。」

と手話であいさつをしました。

「よろしくお願いします。手話が上手だね。これからも、がんばってね。」

と笑顔であいさつをしてくれました。私は、うれしくなって、もつとたくさんの手話を勉強したいと思いました。たった一言、二言ぐらいの会話でしたが、心が温かくなる感じがしました。最初は、手話で話しかけると、とても緊張して、むねがはちきれそうだったけれど、勇気を出して話すことができたので良かったです。その後は、その人と会うたびに手話で話ができ、とてもうれしいです。

その方は、生れた時から耳が聞こえないと母から聞いています。もし、自分の耳がとつ然聞こえなくなってしまうたらと考えると、とても辛いことだと思います。どれだけ辛いか想像もつきません。それ以上に、耳が聞こえないということで、話してくれる人がいなかったら、一人ぼっちになった感じがして、とてもさみしいと思います。だから、私は、今まで以上に手話の勉強をして、ろうあの方と会話ができたら良いなと思っていました。耳が聞こえない、話すことができないということで、遠ざかっていくのではなく、母から手話を教えてもらい、少し会話ができるようになったように、自分から一歩でもいいので、ろうあの方に近づいていけたらと考えています。

手話で初めて話ができた時の心に感じた温かさをこれからも忘れずに、障がいをもった方と関わりをもっていきたいです。

電車での思いやり

愛西市立佐屋小学校六年

加納 莉愛

私たちは、遠くへ行くときに電車を利用します。電車には「優先席」という席があります。みなさんは、どんな方が座る席なのか知っていますか。基本的には、お年寄りの方、乳幼児をお連れの方、妊娠している方、そして、内部障害のある方といった体の不自由な方が座る席です。

その中でも今、問題になっているのが、「内部障害」での差別です。内部障害とは、外見では分からない、体の中にもつ障害のことです。

この内部障害が、電車の優先席での差別の主な原因だと考えられます。私が以前電車に乗ったとき、優先席に若い女の人が座っていました。そのとき私は、「お年寄りの方や体の不自由な方が座る席なのに、どうして？」と思いました。しかし、その女の人のかばんをよく見ると、「マタニティマーク」という妊婦さんがつけるストラップがついていることに気がつきました。そのとき私は、「人を見た目で判断してはいけない」と改めて思いました。

また、残念なことに体に不自由がないのに優先席に座る人も見かけます。もしこのときに、体の不自由な方が来られたら、安心して乗っていただけるでしょうか。どの席も空いていなければ、体の不自由な方はずつと立ちっぱなしで目的地に着くのを待たなければなりません。

そこで私は三つの提案をします。

まず一つ目は、人を外見で決めつけないということです。勝手に決めつけたことがまちがっていたら、自分の心も気持ちよくないですし、決



めつけられた人の心もさらに気持ちが悪くないと思います。だから、相手の様子をよく見て、状況を知ることが必要だと思います。

二つ目は、健康な状態であれば、優先席に座らないということです。考えてみれば、体に不自由がない人が座る席ではないですし、それらの人が優先席に座ったせいで、電車内でのトラブルも、起こりうる可能性があります。そのようなトラブルを引き起こしてまで座る必要はないと思います。

三つ目は、自分の身の状態を知らせるということです。私たちは、まだ小学生ですが、大人になったら体に障害をもつ人もいるかもしれません。そのときのために、今、このことを知っておけば、将来電車に乗るときに役立つと思います。

このように、人を思いやる気持ちを大切にして、電車内での過ごし方を、もう一度見直してみませんか。一人一人が思いやりを絶やさずに行動していけば、相手も自分も気持ちよく過ごすことができます、いつか優先席がなくても、体の不自由な方がいたら当たり前のように席をゆずる日常がやってくると思います。「相手のことを思う」たったそれだけのことです。私たちは、おたがいに気づかいながら行動していくことが大切だと思います。



福祉とボランティア

新城市立千郷中学校一年

梅田 禅之助

私は、四年前に起きた熊本地震の募金を呼びかける活動に参加しました。ポ一イスカウト活動の中に募金活動があったからです。熊本地震については、すごく大きく長期的な地震だったという、大まかな情報しか知りませんでした。しかし、その活動で、私の考えは大きく変化しました。

募金が終わった後です。隊長から、十万円ほどの募金が集まったと聞きました。

募金はとても簡単です。箱の中にお金を入れれば良いだけです。しかし、募金をするかどうかは自由ですので、いろいろな対応をする人がいました。見向きもしない人、気付いてはいるけれど去る人。そんな中で、募金をしてくれる人もいました。なぜ地震と関係の無い愛知で、強制でもない募金活動したら十万円も集まるのか不思議でした。

被災者がいるのは周知のことです。もし被災者を支援したいなら、募金ではなく、必要な物資を送るという方法でも良いのではないかと考えました。一方で、被災者になったことがないので本当はどうか分分かりませんが、被災者は水を送られてきても困るのではないかとも思いました。そうだとすると、被災者を支援したいという気持ちを持った人が、ポ一イスカウトというある程度名の知れた団体に募金してくれることは、

被災者のためになることだと改めて思いました。

どのような理由であろうと、社会を安定させるために、幸せのために、誰かを助けるために募金をしてくれたことに変わりはないでしょう。被災していないのに、募金をしてくれることは、とても素晴らしいことだと感じました。

三年前、新城市社会福祉協議会の、防災ボランティアコーディネーター養成講座に参加しました。ボランティアコーディネーターとは、ボランティアの受付や案内などを行うものです。初めは、父に連れられて行っただけで、何のために、何をしに行くのかほとんど分からない状態でした。しかし、災害時のボランティア活動の講座を受けているうちに、災害について学ぶことができました。

これまでは、被災者がどういった状態になるのかということについて、大まかにテレビで見たことがあるぐらいで詳しくはありませんでした。しかしこの講座で、断水何万户、全焼何千棟などの細かな被害の情報まで把握することができました。また、南海トラフ地震の被害想定などを見て、どれだけ震災が恐ろしいものか、学んだことを基にどのような対策をしなければいけないのか、なぜそのような対策をしなければいけないのか、考えることができました。

今まで私は、いくつかの災害に対するボランティア活動に参加してきました。その中で学んだことを三つ挙げます。一つ目は、ボランティアの支援力はとても大きいということです。行政は、公平に接するので、個別に対応することが不可能な一面があります。消防の数にも限界があるため、被災地ではボランティアによる力が、大きく地域の支えになっているのです。

二つ目は、日々の備えはとても大切だということです。物資の備えもとても大切ですが、助け合える環境を作っておくこと、つまりコミュニケーションを活発にしておくことも大切です。避難所の周知もしておく必要があります。



三つ目は、他人事だと思わないでおくべきであることです。いつかは起きるだろうと、想定しておくことが大切です。また被災者に対しても、他人事だと思わず、同じ日本国民、地球民として、募金などにも協力できたら良いと思います。

福祉とは、幸せに繋がります。高齢者のための公的なことだけを福祉というわけではありません。被災者などの、生活が一時的に安定していない人の苦しさに対して助けることも、福祉だと思います。

経験を通して私が思ったことは、他者の苦しみを理解し、それに応じた助けや働きが大切だということです。他者のことを考えて接し、働けるような人になりたいと思いました。

あの人にまた会ったのなら、

知多市立八幡中学校一年

鰐部 彩葉

— ガラガラ —

あの人に会ったのは中一の夏のこと。下校の途中、車いすの人が踏切を渡ろうとしている姿が目に入った。その踏切は段差が多く、何度も車いすをゆらしながら渡っていく。その人と私は目と鼻の先に居て、声をかけるべきか迷ったが、結局黙って通りすぎることに出来なかった。その人は無事に渡り切ったが、私の心はモヤモヤしていた。

やっぱり話しかけた方が良かったのかな。そんな気持ちは湧いてくるけど、次に会ったら言葉は出てこなくてまた黙って通りすぎる。結局、私の下校の時間が変わってあの人とは会わなくなっていたー。

「福祉ってなんだろう」

もしそう聞かれても、私は何も答えられないと思う。私は健康だから、福祉なんて関係ない。実際、道徳や総合の授業でも、あまりピンとはこない。私には関係のないことだと思って過ごしてきた。あの日まで。

私は八月頃に足をケガしてしまった。骨折とまではいかなかったが、重度の捻挫だった。二週間の間だけギブスをはめることになった私は、「格好悪いなあ。早く取れないかな。」

としか考えていなかった。

しかし、その後の生活は私の思っていたものより不便なものだった。歩くのは松葉杖をいっち使わなくてはならないし、階段はもろろのこと、いつも上れていた小さな段差さえ上れない。ちょっとした外出先

でも、周りの目が気になる。

そして、何より大変だったのは学校生活だった。移動はもちろん大変だったが、なかなか周りの人に頼れなかった。

「手伝ってくれる？」

なんて自分から言えない。結局、無理をしてしまう場面がいくつかあった。

「障害をもつ人はもっと大変なのかあ」

私はただのケガだけど、目が見えない人、足が不自由な人はもっと大変。そんな漠然とした考えだったけれど、

「福祉なんて私には関係ない。」

なんて思いは無くなっていった。福祉は体が不自由な人のための言葉じゃない。初めての大きなケガをして、私はそう気付かされた。

福祉について少しだけ知った今、私には気がかりなことがあった。それはあのときの車いすの人のこと。初めてあの人に会ったときは、道徳で同じ様な場面にそうぐうしたら、自分ならどうするか考えたところだった。私は、声をかけて一緒に横断歩道を渡る」とノートに書いていたと思う。それを思い出して私は顔が真っ赤になった。授業のときだけそんなことを言つて、実際には何も言えなかった自分の無力さに腹が立った。と、同時にあの人も頼ることが出来なかったのかなと思った。

「踏切くらい自分で渡れる。バカにしないでくれ。」

と、思われるかもしれない。しかし、踏切以外だって、一人では出来ないこともあると思う。それは、体が不自由な人も健康な人も一緒だ。誰にでも、一人で出来ないことはある。だから、困っている人を見捨てる」ということも、体が不自由な人だから助ける」ということもしたくない。あのときの私のような、見て見ぬふりは絶対にしたくはない。それに、不自由だから、かわいそう」だなんて理由は、助けられる側は正直嫌だと思う。私がいもし、障害をもっていたらそんな理由で助けられるのは、見捨てられるよりも、もっと嫌だ。どんな人でも、困っていたら

助けられる人。こんな人に私はなりたいたいと思う。体が不自由な人とそうではない人の境界線」を作りたくない。

この福祉体験コンクールは毎年募集されていたけれど、一度も応募はしたことがなかった。それは「福祉なんて…」という考えがゆえだ。けれど、自分がこの様な体験をして初めて書いてみようと思った。

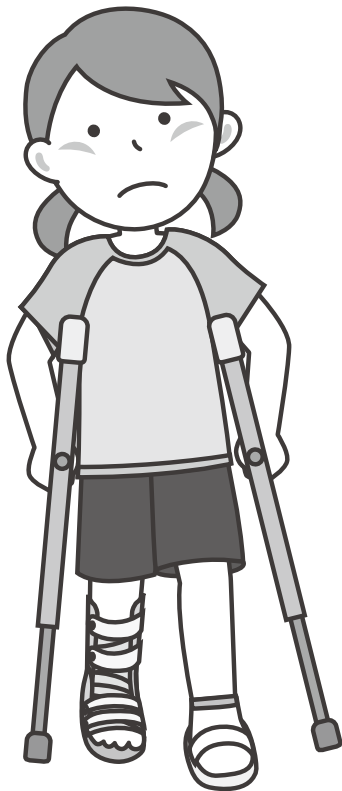
ケガをして、初めてその大変さ、自分の理不尽さを知った。自分がどれだけ無力かということも。

あの人に会って、障害をもつ人のつらさを知ったし、自分達が無意識につくってしまった壁のことも知った。

もう一度あの人に会ったのなら、私は声をかけることが出来るだろうか。弱虫な自分に言うことが出来るだろうか。また、同じことの繰り返しになってしまうだろうか。

いや、だからこそだ。だからこそ私は、あの人へこう言いたい。

「大丈夫ですか。なにか手伝うことはありませんか。」



「普通」って何？

豊明市立沓掛中学校一年

石川

葵

普通とは、特に変わっていないこと。ごくありふれたものであること、と定義されている。また、人は普通と違うと嫌悪感を抱きやすい。

私の従姉妹にSという女の子がいる。Sは出産時、低酸素により脳室周囲白質軟化症となってしまう。その後、てんかんを患ってしまう、寝たきりの状態だ。手足をうまく動かせず、発語もできない。そんなSだが、いつもその周りには多くの人が集まる。

母の兄弟は五人。従兄弟は全員で十二人。お盆やお正月、また行事で集まることが多い母の実家ではいつもSを中心に遊んで盛り上がり楽しむといった光景は常である。でも、一歩外へ出ると様子は激変するのだ。

Sが一・二歳くらいの時はまだ良かった。叔母が抱っこひもにSを入れて外出できていたのが、成長に伴って抱っこひもでは支えられなくなり、今はバギー型車いすといった乗り物に乗っている。そのバギーは大きく、重量もある。外出となると、バギーを車に乗せ、お出かけ。目的地に到着したら、バギーを降ろし、Sを座らせる。いざ入店、と足を進めるが、スロープのある場所を探さなくてはならない。やっとお店に入っても通路が狭く中まで入っていけないことも多い。そういう時は、私はSとお店の前で一緒に遊んで待っている。そんな時、通りすがりの人がジロジロ見てきたり、もっとひどい時は見てはいけない物を見た目で見たり、コソコソと小声で話したりする姿を目撃する。私はとても嫌な気持ちになり、叔母に言った。「Sのことを見たり、悪口を言ったりして

いるみたいだ。」すると叔母は「いいのよ。どんどん見てもらいましょう。世の中、色々な人がいるってことを知ってもらわないとね。」と笑顔で答えた。「どうして？腹が立たないの？」と聞くと、「そりゃ、大事な娘を悪く言われて悲しいけど、Sは何も悪いことをしていないんだから堂々としていたらいいのよ。」と言う叔母の顔はとても格好良くて、輝いて見えた。私もその言葉を聞いて以来、周りの目や声が少しづつ気にならなくなった。それをきっかけに、私は率先してバギーを押すようになった。すると、色々なことに気付かされた。

自分が難なく歩いている道路だが、段差や小石が想像しているよりはるかに多く、バギーで通るとガタガタしてハンドルをとられてしまわない。また、外出の際、優先駐車場に停められないこともある。車イスマーク等付けていない車が停車しているのだ。そうなると雨の日は最悪だ。バギーに日よけはあるが、傘はない。だから手助けしてくれる人が同乗していない時は諦めて帰ることもある。そういう常識のない人には心底がっかりするものだ。優先駐車場に停めることができ、お店へ入ったとしてもまた試練がやってくる。通路が狭かったり、陳列している商品が通路まで侵入し、中へ入っていけない。人とすれ違うこともできないのがほとんどなので、いつも向かいから来る人に下がってもらいお礼を言わなければならないのだ。こういうことを叔母はいつも一人でやっていることなのかと思うと尊敬しかない。本当に大変なんだと思う。でもそんなことを叔母は決して言わない。いつも穏やかで笑顔なのだ。一緒にいる私にも気遣ってくれる余裕もあってとても驚いてしまう。私はそんな格好良い叔母を誇りに思う。

こんな素敵な叔母とSを世の中の人は何と判断するか、普通ではないと言うだろうか。普通でないことで何がいけないのだろう。みんな顔も違うし、声も違う、体型だって人それぞれだ。学力だって違う。その延長線上に肢体の不自由だってあるんじゃないかと思う。だから普通というくくりで、縛るのは私は嫌だ。それぞれに個性があって長所・短所が

ある。それを非難したり、おもしろがったりする権利など誰にもない。普通という言葉が人を惑わす。そんな過ちを起こすような言葉を使わないようにしたい。世の中の意識が変わっていけばSのように一生懸命生きている子たちが、もっと楽に楽しめる人生が送れると思う。私は、これからも大好きなSと一緒に出かけたり遊んだりして、もっと色々な人にSを知ってもらいたい。そして、きつとみんなSを好きになってくれる。そんな温かい世の中になってくれることを心から願う。



正解なんてないけれど

豊橋市立高師台中学校二年

中根 あさひ

新型コロナウイルス感染予防のための長い休校期間に私は一冊の本に出会いました。

東田直樹さんが私と同じ十三才の時に書いた「自閉症の僕が跳びはねる理由」という本です。現在二十八才の東田さんは、会話のできない重度の自閉症。話そうとすると消えてしまう言葉を引き出すために文字盤を使ってコミュニケーションを取ります。この方法で本当の自分の言葉を人に伝えられるようになるまでに、長い時間がかかったそうです。

東田さんは、少し不思議に感じることもある自閉症の人の行動やコミュニケーション、感覚などについてわかりやすく質問に答えています。自閉症の人が書いた本ではなく、私と同じ中学生の言葉として読んでみると親近感がわいてきました。

私はパラ水泳チームに所属しています。いっしょに練習をするチームメイトには、自閉症の人や知的障害のある人がいます。自分の決めた手順を変えることが苦手な人、大きな音が怖い人、会話は苦手でもコーチの説明は理解できている人。私に得意なことや苦手なことがあるのと同じように、いっしょに練習をしたり過ごしたりする中で自然に打ち解け、理解をしてきました。

ただ、時にはこんなこともあります。リレーの引き継ぎ練習でプールの両端に分かれる時のこと。

「あさひたちはこっち、〇〇くんたちはあっちね。」



という指示にみんなが立ち止まってしまったことがありました。慣れたプールであっても具体的に曖昧な言葉はわかりにくいと気づきました。

そんなことを思い出しながら、東田さんはなぜこの本を書いたのだろうと考えました。自閉症のことをわかってほしいという気持ちももちろんあったと思います。でも私はそれ以上に、偏見の目で見られたり理解されなかったりするつらさや悲しみを伝えたかったように感じました。障がいがあっても幸せで豊かに生きていることを伝えたかったのだと思います。

現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のために、私の水泳チームは三月から活動を休止しています。学校のプールも今年には使えないので、私は市のプールなどで練習をしています。制限があっても練習できることがうれしいです。それなのに私たちの水泳チームはまだ一度も練習会を再開できていません。

その理由は、更衣室の利用やマスク着用の問題です。感覚過敏のためにマスク着用が困難な人、感情のコントロールが難しく大きな声を出してしまう人がいることへの不安。練習中コーチや介助者はマスク着用を求められており、指示が適切に伝わるかの心配。運営側と保護者で合意ができないでいます。

感染拡大防止、感染予防のためには仕方がないという意見。それではいつになっても練習再開ができないという意見。私はどちらも共感できます。マスク着用ができ、ルールが守れる人から始めればいいという意見もあります。誰もががまんし工夫している。障がいがあるから特別ということはない、という意見。正解のない話し合いが続いています。

障がいのある人についてだけでなく、さまざまな立場や職業についても連日報道されています。私も関心を持ってテレビや新聞、インターネットを見るようにしています。いろいろな立場を想像しながら自分の中で考えてみるようにしています。

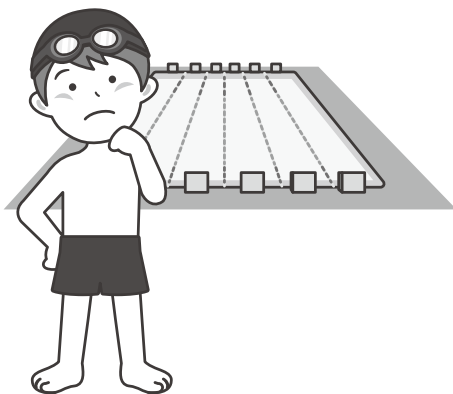
だからこそ、私は練習をすぐに再開してほしいとは言えないでいます。障がいのある人や家族の気持ち、プールを運営する人の責任、プールを一般利用している人の不安、考えれば考えるほど迷ってしまっています。

チームの役員をしている母の考えも聞いてみました。この状況が長く続くのはよくないと思うけれど、いろいろなことを考えるとすぐの再開は難しいと思うとのことでした。

ただ、新型コロナウイルス感染予防を機に例えば感覚過敏でマスクの着用が難しい人がいること、マスクを着用していると情報をキャッチできない人がいることなど、当事者でなければ気がつかないことを教えてもらえたことはこれから役に立つよね、と話をしてくれました。

水泳チームは十月の再開を目指して話し合いを重ねていくそうです。

私はこれから大切なことは、自分の考えを主張することだけでなく、いろいろな立場の人に心を寄せてみるような気がします。私は平気でも誰かにとっては大きな不安かもしれない、そうやってみんなが誰かを思いあひながら考えていくことが必要になってくるように思います。いつか以前のように思いっきり泳げる日がきても、今感じていること考えたことを忘れないでいたいのです。



ボランティアへの一歩

一宮市立尾西第一中学校二年

土井 未彩

先日、祖母の家に耳の不自由なおばさんが訪ねてきた。祖母は出かけていたので私が話を聞くと、自宅の電球が切れたが、自分では取り換えられず困ってしまい、民生委員の祖母を訪ねに来た、ということだった。おばあさんの名前と連絡先、住所を教えてもらい、後から祖母がうかがいます、と伝えて帰ってもらった。初めてのことで、戸惑いや緊張がどきどきした。

隣に住む祖母は、民生委員をしている。「民生委員」という言葉は聞いたことはあるが、実際にどんなことをしているのか、私はよくわかっていなかった。祖母が帰宅するまでにインターネットで「民生委員」を調べると、「常に住人の立場に立って相談に応じ、必要な援助を行い、社会福祉の増進に努める」とあった。民生委員制度の歴史は深く、一九一七年の「救済顧問制度」を始まりとし、生活困窮者の支援を中心に全国に広まった。現在ではすべての市町村に一定の基準が定められ、全国で約二十三人が活動している。祖母が民生委員として地域の福祉の一端を担い活動をしていると知り、純粹に「おばあちゃんってすごい」と感動した。誰に対しても優しく親切で、いつも自分のことよりも人のことを考えて、できることがあればすぐに行動に移す祖母。家族だけではなく、地域の住人のことも同じように大切に想い、困っていることがあれば一緒に考え手助けしていたのだ。

帰宅した祖母に留守中にあったことを伝えると、少し真剣な顔をした

後すぐ笑顔になって「未彩ちゃんありがとう。すごく助かった。そのおばあさん、一人暮らしなの。今からおばあさんの家に行ってくるね」とおばあさんの家を訪ねに行った。祖母はもう六十九歳で、身長は私よりも低く小柄な方だ。祖母が無事におばあさんの家で電球を交換できるのか、耳が不自由で自分で電球の交換ができないおばあさんが、これから一人で生活できるのかと、色んなことが頭に浮かび心配になった。ただ、心配しても自分にはできることが思いつかず、祖母の帰りを待つことしかできなかった。

私の父親は臨床心理士の資格を持ち児童相談所で児童心理司として勤めている。母親は社会福祉士の資格を持ち市役所の障がい福祉課で働いている。自宅では父母のお互いの仕事の話を耳にする。保護者から虐待され傷付いた子ども、父母を失い住む場所がない子ども、障がいを持ち生活するのが困難な人。私がテレビやネットニュースで見ると父母は日々対面し、できる支援を行っている。ただ、私の中ではそのことも現実ではないどこか別世界の出来事のように思っていた。そういった困難な状況を目の当たりにしたことがなかったからだ。そして想像することや理解しようとする努力をしなかったからだ。今回の出来事で、すべてが私の住むこの国で、地域で、もしかしたらすぐそばで、実際に起きている出来事なんだと実感した。

私ができるボランティアとは何かを考えた。今は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、施設を訪問することや、大人数での活動に参加することはできない。しかし、ボランティアとは自分の意志さえあれば誰でもどこでも取り組むことができるのではないか。周囲をよく見れば、通学途中に車いすで通勤している人に会う。スーパールに行けば重い荷物を運んでいるおじいさんやおばあさんがいる。ゴミを収集所に出しにくくと、いつも通路の掃除をしてくれているおじいさんが笑顔で「おはよう」と挨拶してくれる。そうだ、私にもできることがあるかもしれない。その一歩を踏み出すか、踏み出さないか。勇気のない私には大きな一歩



だ。

先日、学校で掃除ボランティアの募集があった。友達に声をかけてもらい一緒に参加した。普段どおり決められた場所を掃除したのだが、これが学校、先生、友達のためにもなるんだと思うと、自然といつもより念入りに、できた。ボランティアを終えきれいになった教室やトイレを見渡すと、とても清々しい気持ちだった。

周囲を思い、行動を起こすためには、広い視野や気づきが必要だ。小さなことでも自分ができることを行えば、誰かの笑顔や安心につながるかもしれない。そしてそれがめぐりめぐって自分の心までも豊かにする。私には何かできるか。勇気を持った一歩を続けていきたい。

知ることの大切さ

清瀬市立新川中学校二年

山内 菜々恵

「知ること」それは共生社会をつくっていくうえでの第一歩だと思います。

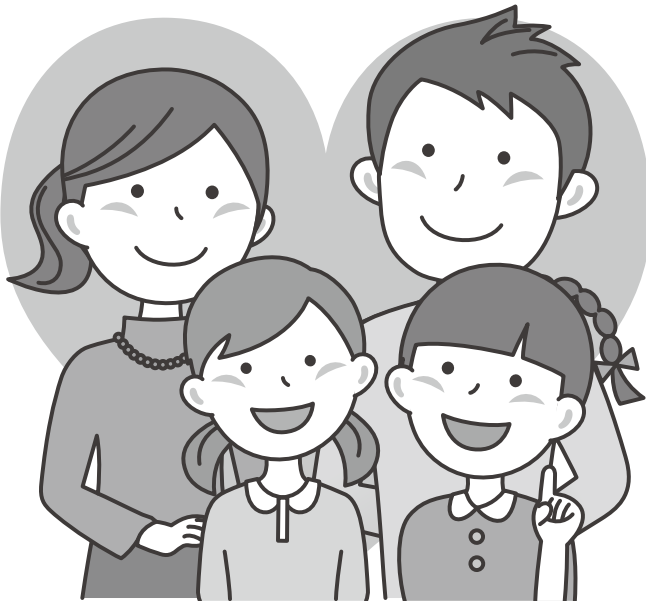
障害をもつ人達への印象は、それぞれだと思います。多くの人々が、障害のある人は手助けを必要とし、見守ってあげないといけない、弱い立場の存在としてとらえられがちです。でも、私はそうではないと思います。私の姉は、ダウン症です。ダウン症は、発達の遅れ、見た目の特徴、合併症を生じることがあります。以前は、障害のある姉には私の手助けがたくさん必要だと考えていました。でも、ある時私は、姉を支えている以上にたくさん姉に支えられていたことに気がつきました。本当に姉が必要なのは、私の方だったのです。私は人見知りなので、初めて行く場所には必ず姉がついてきてくれます。頑張っている時には、一番に励ましてくれます。出しっぱなしだった物も、いつの間にか片づけてくれます。一人でお風呂に入れない時も、なんだかんだ言いながら、一緒に入ってくれます。私は姉のそういう優しさにとっても助けられています。また、私は姉の得意なこと、苦手なことを知っています。だからこそ、いざという時に私は、姉に手を差し伸べることができるのです。例えば、姉は会話をする時に、早口になり、聞き取りにくくなったり、適度な声量が分からず大声で話してしまったりします。だから私は、姉を急がせないよう落ち着いて会話するようにしています。姉は少しへそ曲がりなところもあって、すねて動かなくなってしまうことがあります。

そんな時には、無理に動かそうとするのではなく、きちんと理由を聞いて解決するようにしています。また、お金の計算をすることも苦手です。だから、お買物が予算内でできているかを一緒に確認します。自分の気持ちやうまく言葉で伝えることも苦手です。滑舌が悪く、言葉の引き出しをあまりもっていないので、言いたいことをうまく伝えられないことがあります。そういう時には私が聞いて、他の人に伝えます。このようにお互いの足りないところを補足し合うなどし、支え合うことができる世の中になればもっと世界は明るいのではないかと感じます。しかし、身近に障害をもつ人がいなかったり、理解する機会が少なかったりしたらどうなのでしょう。何に困っているのか、どう接するべきなのか、本当に分からないと思います。もしかしたら、不審な目で見てしまうかもしれません。彼らのことを知ろうとすることで、彼らの行動に対し、迷惑に思うのではなく、「どうしたんだろう」と考えられるようになります。それだけでも、その人への接し方や、印象は変わってくると思います。

私は友達に「障害をもっている姉は嫌？」と聞かれたことがあります。私はすぐに「嫌じゃない」と答えました。でも、以前の私は姉のことを知られたくないと思っていました。姉は学校でも人目を気にせず歌ったり、踊ったりするし、他人のことをじっと見つめるのです。私はそれがとても恥ずかしくて嫌でした。でも今、「障害をもっている、もっていない、私にとって、私の大切な優しい姉であることに変わりはない」そう思えます。障害は決して不幸なことではないのです。

私は二〇一六年に起きた事件をきっかけに強くそう思いました。知的障害者福祉施設の元職員が、入所者を刺殺した事件です。被告人は、意思疎通ができない障害者は、人々を不幸にするだけなので、安楽死させるべきだと考えていたそうです。遺族のことを思うと、胸が締めつけられるようで苦しかったです。なにより驚いたことは、被告人の考えに賛同する人が他にもたくさんいるということです。きっと彼らは、今までに障害者と関わってこなかったのではないかと思います。障害があつて

も、私たちににとってはかけがえのない大切な家族です。障害への理解があれば、こんな最悪な事件は起こらなかったと思います。互いを理解する共生社会をつくるために、子どものうちから理解を深めておく必要があると考えます。特別支援学級の生徒との交流を増やしたり、障害者についての授業を取り入れたりするのも手段の一つではないでしょうか。障害者は不幸な存在だという考えが少しずつ減っていくことを願います。無駄な命は一つとしてありません。障害者も健常者も同じです。それぞれ良さがあり、個性もあります。互いの良いところを知り、補い合っていけば、偏見や差別はなくなっていくと思います。「知ること」を大切に、共生社会への第一歩をみんなで歩んでいきたいです。



笑顔のお返し

設楽町立津具中学校三年

佐々木 穂乃花

お年寄りの皆さんが笑顔で言ってくれます。

「ありがとうございます。きれいな歌声を聴かせてくれて本当にありがとうございます。」
「上手だね。聴いていて涙が出ちゃったよ。」

私の通う中学校では、毎年、地域の高齢者の方々がデイサービスに集う偕楽園という施設を訪問し、合唱を聴いていただいています。私たちが歌い終わると、お年寄りの皆さんはたくさん拍手をしてくださり、目を細めてこうした温かい言葉をかけてくださいます。お年寄りの笑顔を見ると、私はその何倍もの笑顔をお返ししたくなります。

私はどんな人の笑顔も好きですが、お年寄りの笑顔が大好きです。お年寄りの笑顔は、優しさに満ちあふれていて、周りの人への愛が詰まっているように思われます。また、生きていることを幸せに感じて感謝しているように思われます。戦争を体験されたお年寄りからは特にそうした感じを受けます。

偕楽園を訪問してお年寄りの皆さんに合唱を聴いていただいたり、一緒に話をしたりすると、いつもお年寄りの皆さんは笑顔で私たちを優しく包み込んでくださいます。私はその笑顔を見るととても幸せな気分になり、一層心を込めて歌い、笑顔をお返しします。友達もみんな懸命に歌い、にこやかな表情をしています。澄んだ歌声が響き、ゆったりとした時間が流れます。

ところで、この福祉体験作文を書き始める前に、私は改めて「福祉」

という言葉の辞書で調べてみました。そこには、「幸せや豊かさを意味する言葉で最低限の幸福と社会的な支援を提供すること」と書かれています。それを読んだとき、偕楽園でのお年寄りの皆さんとのあの心地よい時間のことを思い出しました。とても幸せで心豊かな「福祉」という言葉がぴったりの出来事でした。

そして、私は「福祉」ということを身近に感じるようになりました。それまでの私は、「福祉」とは行政や社会人として自立した大人が中心となって生活に困っている人を援助するものだと考えていましたが、私も「福祉」の担い手になれると思うようになりました。

偕楽園訪問は小学校の頃からずっと続けている活動です。小学生のときには、お年寄りの皆さんと福笑いやすごろくのような遊びを一緒にしたり、ブラスバンドの演奏を聴いていただいたりしました。そのときもお年寄りの皆さんは大変喜んでくださり、ずっと優しい笑顔でした。中学生になってからは、合唱を聴いていただいたり、肩たたきをしたり、お話を聞かせていただいたりしました。こうしたことも「福祉」そのものなのだと思います。「福祉」は難しいことではなく、誰にでもできることだと思えるようになりました。

けれども、本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、偕楽園訪問はまだ実施できていません。お年寄りの皆さんとの交流ができないまま卒業するのはとても寂しいです。もちろん、お年寄りが新型コロナウイルスに感染してしまったら重症化してしまう危険もあるので、安全を第一に考えることが大切です。お年寄りの皆さんにご迷惑をかける形での活動を考える必要はありません。これまでの訪問でお年寄りの皆さんからたくさん温かい笑顔を見ただいたので、私も笑顔のお返しをして卒業したいと思っています。今後、どのような形で行うのか、内容や方法をじっくり考えていきたいと思います。

もしかしたら、新型コロナウイルスの感染拡大の状況によっては、偕楽園訪問はできないかもしれません。けれども、私にできることはあり

ます。その一つは登下校時に会おう地域のお年寄りに笑顔で挨拶をすることです。笑顔で元氣よく挨拶をするだけでも、お年寄りの方は優しい言葉をかけてくださいます。「おはよう。氣をつけて行つてらっしゃい。」挨拶は「福祉」の第一歩のように思えます。多くを語らなくても、笑顔で挨拶を交わすだけで心が通じ合います。ささやかなことですが、幸せと心の豊かさを感じられることです。私はこうしたささやかさの中にある幸せや豊かさを大切にしていきたいと思っています。

また、私は「福祉」には人と人との関わりと思いやりが必要だと考えるようになりました。今後もコミュニケーションをとることに努め、福祉体験活動にも積極的に参加して、お年寄りの皆さんをはじめ、巡り会う人たちに、笑顔と私にできる精一杯のことをお届けしていきたいと思っています。そうすれば、人間関係は豊かになり、より楽しい日常になるはずです。誰もが笑顔の「福祉」の担い手になったら、きっと今以上に幸せな心豊かな社会になります。私もそんな担い手の一人でありたいと思います。

私はお年寄りの優しさあふれる笑顔に笑顔の大切さを教えられました。笑顔のお返しを心がけて「福祉」を進めていこうと思います。



本人がそう言うから

愛知県立海翔高等学校 一年

勝野 結依

私のいとは自閉症です。インターネットで調べてみると、『自閉症児は、コミュニケーション能力に困難が生じる。自分の思いがかなわないと感情が大崩れする。じつと出来ないなどが特徴である。自分が興味を持った対象には固執するなどこだわりが強い。』と書かれています。まさに、その通りだと思いました。

いとは今年、中学生になりました。普通の中学校ではなく、特別支援学校に行くことを選んだそうです。伯母さんはどちらに入学させるべきか、とても悩んでいました。しかし、特別支援学校を選んだのは、いとこ本人だそうです。その理由には、いとこの両親も、私たち家族もみんなが仰天しました。それは、「どうしてそっちがいいの？」という質問に対し、いとこはたった二言「ボーリング」「バス」と言ったからです。いとこはバスとボーリングが好きで、その学校はバス通学だったからです。さらに、学校を見学しに行った時にボーリングをさせてもらったことがきっかけで、その日から「こっちの学校がいい」と言い出したのです。伯母さんはギリギリまで悩んでいたけれど、結局「本人がそういうから」と特別支援学校に行かせました。

『本人がそう言うから』私はこの言葉に賛成する一方で、行きたい理由がそんなに単純でいいのかと疑問と少しの不安がありました。私は今ま

でいとはを見てきて、いろんな感情を抱いてきました。最初は嫌な気持ちです。いとはは、同じ小学校に通っていました。私が四年生の時、いとはが小学校一年生になりました。自分のいとはが障害児であることが知られて、からかわれるかもしれないと思い、いとはのことが嫌いでした。しかし、いとはは私を見つけるとうれしそうに抱きついてくるのです。私は頭の中では、「やめてよ」という気持ちもあるものの心の中では、「可愛いな」という気持ちもありました。また、いとはがいじめられないかと心配もしました。この年の運動会では、初めていとはと一緒に走ったので、嫌でした。リレーではいとも走るのですが、他の一年生とは能力が全く違い、いとはの番で最下位になってしまっているのではないかと、みんなに迷惑をかけるのではないかと、いとはには走ってほしくなかったです。ところが、運動会本番、私の今までの思いが全部ひっくり返ったのです。私は嫌だなど思いながら、いとはが走るのを待っていました。ついに、いとはにバトンが渡り、私は思わず大きな声で応援していました。そして、何人かに抜かれて最下位になった時、私は気づきました。みんながいとはを応援してくれていることに。他の人の時とは違うすごく立派な声援でいとはは、無事にバトンをつなぎました。私はその時すごく胸がぎゅーとなりました。いとはのことをちゃんと認めてくれているように思い、今まで障害のあるいとはを恥ずかしがっていた気持ちがすっとなくなりました。今、その頃のことを考えるとかわいそうなことをしてしまっていたと涙が出てきます。この経験が私の『福祉を学びたい』という思いにつながったのかもしれない。そして今、私は障害者施設への実習のため、障害について勉強をしています。障害者だからと特別視するのではなく、障害と関係なく、一人の人間として尊重することが大事だと学びました。そしてこの時、分かったことがあります。『本人がそう言うから』この言葉は本人の意志を尊重したものだということです。いとはは今、毎日楽しみに学校に行っているようで、誰一人と後悔していません。障害者であろうと障害児であろうと個人として尊重すること

は大切なことだと思います。いとこは今でも私の事を好きだと表現してくれます。私はその気持ちを絶対に裏切ってはいけないと思っています。私は自分の大切な家族を障害者だからと特別な子と見ていて、差別をしてしまっていました。「私が悪い。しかし、そんな世の中で、そんな社会なのも悪い。」私はそう思ってしまう。もつと優しい人ばかりで、その障害者たちを理解し、受け入れてくれる社会になってくれたなら、障害者の『障害者という障害』がなくなるのではないのでしょうか。障害者という個性であふれた人がもし近くに現れたなら、そのあふれている個性を『本人がそう言うから』と理解し、受け入れてほしいです。



夢を後押ししてくれるもの

学校法人さくら学園
安城生活福祉高等専修学校二年

西山

響

私が介護福祉士を目指し、専修学校に入学して一年が経ちました。この一年で、普通科の高校に進んでいたら経験出来なかったことをたくさん勉強することが出来ました。その中でもとても印象に残った体験が二つありました。

一つ目は、高齢者施設でボランティアをさせて頂いた際に初めて利用者の方の髪の毛を乾かした時です。その利用者の方は、

「ドライヤー熱くないですか?。」

など私が声をかけると

「大丈夫だよ、ありがとう、ごめんね。」

と申し訳なさそうに謝られる方でした。この利用者の方は、介護をされる事に常に申し訳ないなど負い目を感じられているのだと思いました。このような事があると勉強をして頭の中で分かっているつもりでしたが、それはただ知識として持っただけであって、なぜこのように思うのかを心の部分で考えて理解することができていなかったと気付かされました。その時の私は

「全然大丈夫ですよ。」

と返す事しか出来ず、今でも謝られた時にこれが私の仕事であり、謝る必要は無いという事を上手に伝えるにはどうしたら良かったのだろうかと考えています。しかし、まだ自分の中で確立した答えは出せていませ



ん。ですが、これは言葉だけで伝えても伝わる事では無いのかなと思います。そのため、私はこれからの日々を過ごしていく中で、利用者の方自身の存在が大切なんだと伝えていけるような態度で人間関係を築いていけるようにしたいと思っています。

二つ目は、介護の勉強を始めて半年ほど経った時にグループホームでボランティアをさせて頂いた時の事です。私はその時、学校生活に慣れ始めて、介護を勉強する事も日常になってきていました。そのため、介護を勉強したい、介護福祉士になりたいと強く想っていた受験生の時に比べて気持ちが薄くなってきたって、本当になりたいのか、なぜ目指しているのか、この仕事をする上でのやりがいとは何だろうと分からなくなり、悩んでいました。そんな時にボランティアに参加させて頂き、利用者の方と一日ゆっくりと過ごす中で、食事の準備をしたりお話をしながら、職員の方の仕事内容を見学させて頂きました。その中で入浴介助の見学をさせて頂くことになりました。職員の方は利用者の方にお湯の温度は熱くないか、かゆい所は無いかなど声をかけながら負担にならないように手際良く身体を洗っていました。身体を洗い終わり湯船に浸かると利用者の方の表情が柔らかくなっているのを見て、入浴介助は介護をする人にとってとても大変な事だと思いますが、利用者の方にとっては、気持ちが良いし、リラックスすることが出来るのだと改めて実感しました。また、利用者の方に寄り添った介護をする上でこの価値感は大切にすべきだと思いました。そして、湯船につかっている利用者の方に職員の方が、

「気持ち良いですか?。」

と声をかけると利用者の方は、とても幸せそうな笑顔で返されていました。その笑顔を見て、職員の方も嬉しそうな優しい笑顔で返されていました。そしてお風呂から出て、靴下を履くお手伝いやドライヤーで髪を乾かすお手伝いをさせて頂くと、利用者の方が私の目を見てくださったので緊張しましたが

「お風呂気持ち良かったですね。」

と話しかけると、私にも先程と同じ幸せそうな笑顔を返して頂きました。この言葉の無いコミュニケーションを見て体験して、介護福祉士としてのやりがいに気付く事が出来、この職業の一番大切な事はこれなんだと感じる事が出来ました。この体験から約一年が過ぎた今でも介護福祉士に本当になりたいのかと、未来に不安になった時にこの体験を思い出して、あんなに素敵な笑顔を見ることが出来る素敵な職業なんだと再認識させてくれる生涯忘れる事の無い私の夢を後押ししてくれる体験でした。

この二つの体験は、介護福祉士を目指す私を後押ししてくれる物になり、仕事をする上でのやりがいとは何なのか、大切にすべき事は何なのかを教えてくれる物でした。この体験で得た物を忘れずこれからも介護福祉士を目指していきたいと思っています。



自分にできること

愛知県立岩津高等学校三年

近藤 未奈子

私は、中学生のときにこれと言って頑張ったことがなく物事に消極的でした。だから、高校生になったら何でもやってみようと思い、その中のひとつに入るのがボランティア活動でした。実際に、ボランティアに参加することで、校内、校外を問わず、様々な体験をすることができました。

校内のボランティア活動では、花の植え替えや体験入学のお手伝いをさせていただきました。

花の植え替えは、私が高校に入ってから初めて経験したボランティア活動でした。たくさん生徒が参加をし、積極的に動いている姿を見て、私も積極的に動いて頑張ろうと思い、良い刺激になりました。

高校の体験入学では、生活デザイン科ならではの学習内容である、色彩について中学生に教えました。普段、私たち生徒は、先生方から教わる側で、あまり気がつかなかった教えることの難しさを実感し、授業をわかりやすく教えてくださる先生方のすごさを知ることができました。

校外のボランティア活動については、福祉まつりや災害ボランティアコーディネーター養成講座、地域清掃ボランティアに参加しました。

福祉まつりでは、高齢者体験のお手伝いをしました。この体験は、身体に様々な器具をつけて動きづらくし、高齢者の身体の状態に近づけてから動いてみることで、高齢者の気持ちに寄り添い、理解しようというものです。体験では、この状態で箸で豆をつかんで、茶わんに移す作業

を行うのですが、手を動かしづらい状態にしているので上手にできません。ところが、補助がついている箸で試してみると、多くの方が上手にできるようになりました。私も実際に体験してみると、思うように身体が動かせず何とも言えない気持ちになり、補助付きの道具のありがたさや、高齢者の方の大変さを身をもって知ることができました。見ていただけではなく、実際に体験してみることができ、人の気持ちがわかります。相手の立場や状況を体験することは、とても大切なことであり、思いやりを持つことができる良い経験だと感じました。

そして、二年生の夏休みに災害ボランティアコーディネーター養成講座を受講しました。災害ボランティアコーディネーターは、災害時に被災者の要望などを細かく聴き、ボランティア希望者に正しく伝え、被災者とボランティア希望者を結びつける役割をする人のことです。

私は、それまで災害ボランティアコーディネーターの存在を知らなかったため、とても良い勉強になりました。また、災害時には、実際に現場で活躍する人や、災害ボランティアコーディネーターのように後方支援で活躍する人がいます。このように災害が起きたとき、災害ボランティアコーディネーターがボランティア希望者を結ぶ役割をすることで、被災地の復興が順調にいくように支えています。

この養成講座では、二日目に本格的な演習を行いました。私の役割は、受付前の時間を利用し、ボランティアの方に活動の流れや注意事項を説明する役割でした。それらをわかりやすく正確に伝えなければならぬので、とても緊張しました。

そして、袋で作るカップや新聞紙で作れるスリッパなど、身近なものを代用してできる豆知識やロープワークなども学びました。

もうひとつ、災害ボランティアコーディネーターには重要な役割があります。それは、被災者の心のケアです。

災害が起きないのが一番ですが、もし起きてしまったら、被災者の心に寄り添って、ここで学んだことを生かし、親身に活動しようと思いま

した。

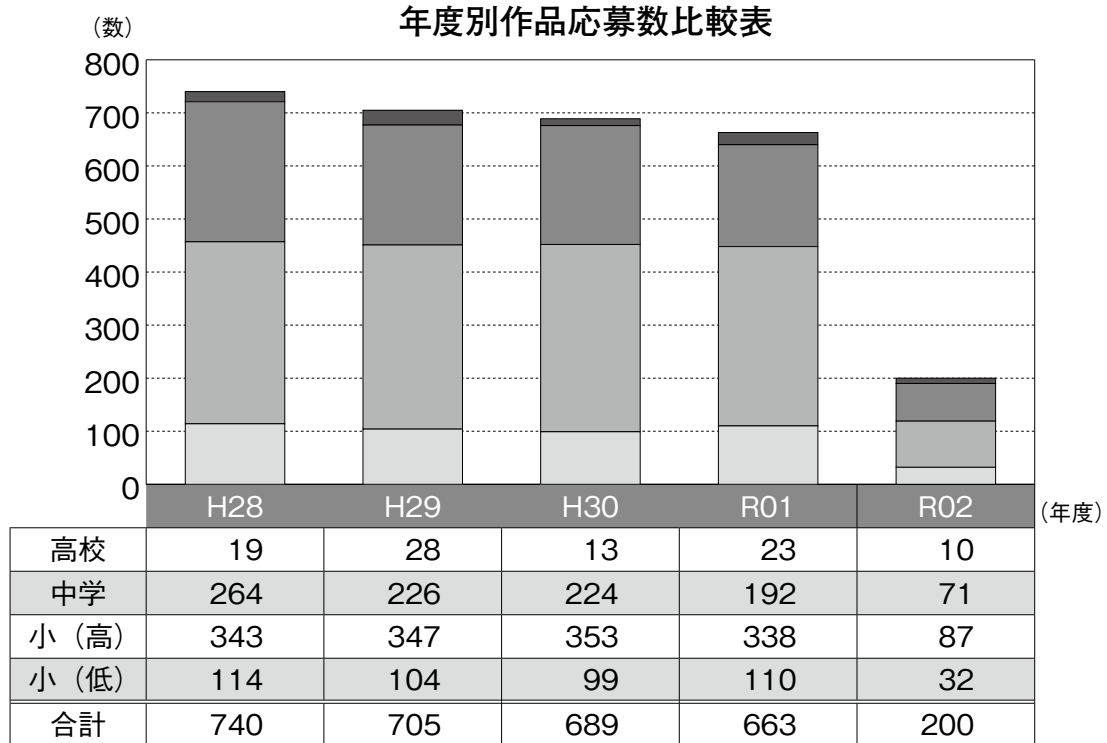
地域清掃ボランティアでは、学校の近くの道や公園にゴミを拾いに行きました。そこでゴミが落ちていない場所があることに気がつきました。初めは不思議に感じましたが、ゴミ拾いをしてくださっている方がいると思いました。私もそういう人を見習いたいです。

今、私たちが何気なく過ごしている中で、人のために行動して下さっている方がいらっしゃいます。そのことをあたりまえだと思わずに感謝しつつ、自分にできることを積極的にを行い、人の役に立つことをこれから先もつとしていきたいと思っています。



■ 福祉体験作文コンクール ■

《応募状況》 応募総数 200編



《審査状況》

福祉体験作文コンクール選考委員会を次の方々に依頼し、募集要項に基づき厳正なる審査をし、部門毎に優秀作品を決定しました。

福祉体験作文コンクール選考委員

(敬称略)

船尾 日出志	愛知教育大学名誉教授
松本 享子	愛知県教育委員会義務教育課指導主事
地福 真紀子	愛知県教育委員会生涯学習課主査
三好 宏和	AJU自立の家わだちコンピュータハウス ユニバーサルサービス事業部
江口 康彦	愛知県身体障害者福祉団体連合会常務理事兼事務局長
堀部 直哉	北名古屋市社会福祉協議会事務局長
西尾 浩志	愛知県社会福祉協議会地域福祉部長



令和二年度 福祉体験作文コンクール募集要項

一、趣 旨

児童・生徒が、学校内外で体験する福祉活動やボランティア活動は自己の幅を広げるための豊かな経験となるものであり、ともに生きる福祉の心を育ててくれるものです。

こうした経験を通して感じたことや考えたことを、素直な気持ちで作文に表わしたものが心に残り、日常生活の中で広がっていくことを期待して、福祉体験作文を募集します。

二、主 催

社会福祉法人愛知県社会福祉協議会

三、応募対象

趣旨に賛同する愛知県内（名古屋市を除く）の小・中・高等学校及び特別支援学校の児童・生徒

四、応募作品の内容

学校での福祉実践教室やボランティア活動等の体験、地域や家庭、身近なところでの体験について、自分の考えや感じたことを表現したものとしします。

五、部 門

- (一) 小学校低学年の部（一～三年生）
- (二) 小学校高学年の部（四～六年生）
- (三) 中学校の部
- (四) 高等学校の部

六、作品規定

(一) 四〇〇字詰め原稿用紙（タテ書）を使用し、各部門の枚数制限は次のとおりとします。

- ア 小学校低学年（一～三年生）——一～三枚以内（四〇〇字以上二二〇〇字以内）
- イ 小学校高学年（四～六年生）——二～四枚以内（八〇〇字以上一六〇〇字以内）
- ウ 中学校・高等学校——四～五枚以内（一六〇〇字以上二二〇〇字以内）

※題名は一行目、学校学年氏名は二行目、本文は三行目から一マス空けて書いてください。

(二) 応募作品は、原則として自筆に限ります。ただし、障害等の場合はその限りではありません。その旨を明記してください。

(三) 応募作品には、所定の応募票を添付してください。

七、応募規定

(一) 小学校及び中学校の応募数は各部門二編以内、高等学校は三編以内とします。

(参考)

- 小学校低学年 一校につき 二編以内（一～三年生）
- 小学校高学年 一校につき 二編以内（四～六年生）
- 中学校 一校につき 二編以内
- 高等学校 一校につき 三編以内

(二) 応募作品は、未発表のものに限ります。

(三) 応募作品は、理由のいかんにかかわらず返却しません。

八、応募方法

下記の応募票を添付し、学校のある市町村の社会福祉協議会に令和二年九月十八日（金）までに応募してください。

九、選 考

選考委員会を設けて、部門ごとに入選作品を合計二十五編程度選考し、令和三年二月（予定）に発表します。

十、表彰等

入選者には賞状、副賞及び優秀作品集を贈呈します。

十一、作品集の作成等

入選作品を掲載した優秀作品集を作成するとともに、入選作品は愛知県社会福祉協議会ボランティアセンターのホームページに掲載します。



令和2年度
第38回 福祉体験作文コンクール

優秀作品集

発行 社会福祉法人
愛知県社会福祉協議会

〒461-0011 名古屋市東区白壁一丁目50番地
愛知県社会福祉会館内
TEL(052)212-5502 FAX(052)212-5503

